



archetype79911

齋藤敏寿 略歴 SAITO Toshiju

- 1963年 高知県に生まれる
- 1989年 多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了
- 2003年 国立筑波大学芸術学系助教授
- 2011年 国立大学法人筑波大学芸術系准教授

近年の主な作家活動

- 2016年 『こども+おとな芸館ナニデキテルノ?』
東京国立近代美術館工芸館（特別招待展示）
- 2016年 『現代陶芸・案内（ガイド）』
茨城県陶芸美術館
- 2015年 『Dorville, 睡眠と覚醒の間のかたち』
国際統合睡眠医科学研究機構新研究棟設置
- 2014年 『交差する表現ー構成専攻の現在』 CROSS SECTION
筑波大学芸術系ギャラリー
- 2013年 『トッテのある形』 多治見市文化工房ギャラリーヴォイス
- 2011年 『Organic Formー土の生命体ー』 現代茨城の陶芸展
茨城県陶芸美術館
- 2010年 個展 筑波大学アーツスペース
- 2010年 『The Kasama ルーツと展開』 開館10周年記念
茨城県陶芸美術館
- 2009年 『ニュータウンピクニック遺跡をめぐるアート展』
横浜市歴史博物館・大塚蔵勝土遺跡公園
- 2008年 『ミニチュアチュール2008』
ART WORKS GALLERY・Gallery MEMORIES
- 2007年 『フタのある形』 多治見市文化工房ギャラリーヴォイス
- 2006年 『現代陶芸の粋ー東日本の作家を中心にー』
茨城県陶芸美術館
- 2005年 『われらの時代』 水戸芸術館現代美術ギャラリー
- 2004年 『ーかたちが切るー日本の現代陶芸』
岐阜県現代陶芸美術館
- 2003年 『現代陶芸の系譜・現代陶芸・14人の尖鋭たち』
高知県立美術館
- 2002年 『現代陶芸の100年展 第一部ー日本陶芸の展開ー』
岐阜県現代陶芸美術館
- 2001年 『現代陶芸の精鋭ー21世紀を開くやさものの手法とかたちー』
茨城県陶芸美術館

パブリックコレクション

岐阜県現代陶芸美術館、筑波大学、国際統合睡眠医科学研究機構

齋藤敏寿 HP

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~toshijulab/>



展示作品

- 熔結81021 The adhesion of melt 81021
陶/鉄w.140.0cm×d.234.0cm×h.132.0cm 2018年（茶室）
- 熔結41021 The adhesion of melt 41021
陶w.35.0cm×d.26.0cm×h.26.0cm 2014年（展示室入口）
- 熔結41023 The adhesion of melt 41023
陶w.30.0cm×d.23.0cm×h.26.0cm 2014年（床の間／床）
- 熔結81022 The adhesion of melt 81022
陶w.20.0cm×d.11.0cm×h.43.0cm 2018年（床の間／壁掛け）
- 結の碗2018-01
陶w.15.2cm×d.16.0cm×h.10.4cm 2018年（茶碗／大）
- archetype79911
陶/鉄w.180.0cm×d.180.0cm×h.225.0cm 1997年（パルコニー）

齋藤敏寿の茶室

熔 結

The adhesion of melt

2018.4.1 [SUN] - 11.25 [SUN]



山口県立萩美術館・浦上記念館
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1
TEL 0838-24-2400 FAX 0838-24-2401
開館時間 9:00～17:00（入場は16:30まで）
休 館 日 祝日・休日を除く月曜日、年末年始、展示替え期間
設備改修工事期間（11/26～2019/3/31（予定））
※ただし、5/7、5/21、6/11、6/25、7/2、7/30、
8/13、8/27、9/3、10/22、11/5、11/19は開館。
※施設・設備保守点検のため臨時休館する場合があります

<http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/>



齋藤敏寿の茶室 熔 結 The adhesion of melt

2018.4.1 [SUN] - 11.25 [SUN]



熔結81021、熔結81022、熔結41023



熔結41021



熔結41022



熔結81022



結の碗2018-01

熔結 The adhesion of melt

白いキャンバスに白い絵の具を塗り重ねていた学生時代
その永遠に終わることのない行為から逃れるように、
表現する媒体を絵画から陶芸に変更した。
そんな意志の弱い私が、今まで陶によるかたちづくりを続けている。
なぜだろうと考えたその理由に自身と作品との距離を受容しなければいけない
2つの制作工程が関係していると思われる。

1つ目は、作品の焼成である。
土が科学的に物質変化する現象を理解することである。
焼成することで可能となるかたちを思考することである。
そのことを強く認識したのは、陶芸をはじめて
まだ間もないある課題制作であった。
作品が焼成により熔融し、ゆがんだかたちが目の前にあらわれたのである。
失敗である結果なのに、そのかたちに魅力を感じ、熱による物質変容の
不思議さと陶によるかたちの可能性を感じたのである。
2つ目は、土の成形である。
表現したい思いを強制的にかたちにしようとしても、
あたかも土に意思があるかのように、思い通りにはならない。
粘土の成り立ちによる土の個性を理解し活用すること。
柔らかい状態の土が固い状態に変化する過程を利用すること。
地球の重力とかたちの関係を考えること。
これらの制約を了解し受容することである。
かたちを創造することの大前提として、自身の思考と目の前で変化する
素材との距離を保ち、作品を客観的に把握し、
モノとコトを了解すること。
その制約と受容が私の表現にあっているのだろう。

茶室の作品たちは、素地土の中に酸化コバルト・二酸化マンガンを
割合を変えて練りこみ、様々なパーツを作成した。
窯の中で熔け合い、結合し重力にしたがって変容したかたち
意志によるかたちと意図できない熱で変容したかたち
そのかたちに合わせ、鉄の角棒を溶接し構成した。

茶室という場にて
社会にある不条理とこれからの未来を想像して
生きていることの意味を考え、
傲慢さやあやまち、自身の無力さを認識し
立ち止まり、様々な考えを享受して
モノとコトを思考する場となれば幸いである。